

2021年度 個人研究実績・成果報告書

2022年 4月 25日

所属	人間社会学部	職名	准教授	氏名	佐藤 哲彰
研究課題	ボランティアの継続等要因に関する実証研究 (①) 他				
研究キーワード	ボランティア、労働時間、 黙示の指示	当年度計画に対す る達成度	4.当初の計画どおり研究が進まなかった		
関連する SDGs項目	4. 質の高い教育をみんなに	8. 働きがいも経済成長も	16. 平和と公正をすべての人に	17. パートナリーシップで目標を達成しよう	

1. 研究成果の概要

①、②、③；進展はなかった。

④(新規)金銭や成績等による外発的動機付けがかえって内発的動機を破壊してしまう「アンダーマイニング効果」について、数年間分の研究計画を立て、今年度はレビューワークを行った。

近年、特にルーチンワークの機械化が進み、創造性重視の機運が高まる中、内発的動機づけの重要性が見直されるようになった(Pink, 2005; Harlow, 1950; Deci, 1971)。労働経済学においても、行動経済学においても、ナッジのような例はあるものの(Thaler & Sunstein, 2008)、内発的動機づけを正面から捉える点においては遅れており、早急な対応が求められる。アンダーマイニング効果は実業界の一部では昔から認識されてきたが、学問的研究においても Deci(1971)や Lepper et.al.(1973)、サルの内発的動機については Harlow(1950)に遡る。この効果は Deci らの自己決定理論の中で「自律性が侵害されるため」を軸として議論が進んできた(Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000)。自己決定理論(基本的心理欲求理論)では、自己「成長」・有能性への希求、他者との関係性強化や貢献への希求とともに、自律性への希求を原初的な欲求と捉え(Ryan, 1995; Deci & Ryan, 2000; Angyal, 1941)、金銭的報酬がアンダーマイニング効果をもたらすのは、それ自体ではなく、「カネに踊らされて働かされている」という感覚が自律性を脅かすことを通してであるとされている(Deci & Ryan, 1985)。Hagger & Chatzisarantis(2011)は、自律志向の強い者にのみ、アンダーマイニング効果が働くとしている。だが、この心理学的(基本的心理欲求理論の)3つの希求・欲求は、ミクロ経済学における利己的人間観・目的変数最大化行動という枠組みに位置づけ直すことが十分できるはずと考えるが、どういう関係を持つのか、先行研究は見つからなかった。

2. 著書・論文・学会発表等 (査読の有無及び海外研究機関等の研究者との国際共著論文がある場合は必ず記載)

【論文 (査読あり)】

なし

【著書・論文 (査読なし)】

なし

【学会発表等】

なし

3. 主な経費

文献購読のためのタブレット購入、研究会費、文献レビュー用の書籍購入費など。

4. その他の特筆すべき事項 (表彰、研究資金の受入状況等)

生活経済学会の企画担当理事の業務を行った。